

少年少女
日本文学館

1

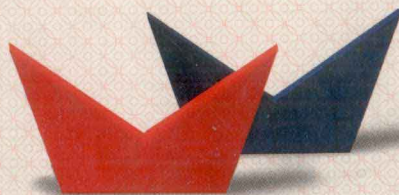
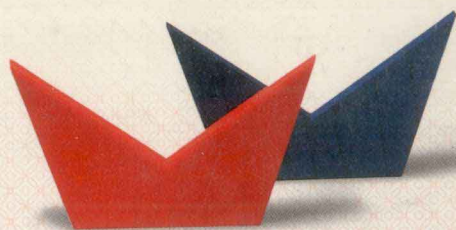
樋口一葉
ひぐちいちよう もりおうがい
森鷗外
小泉八雲
こいずみやくも

たけくらべ・山椒大夫

さんしょう

だゆう

takekurabe
higuchi ichiyō
sanshōdayū
mori ōgai



少年少女
日本文学館

①

たけくらべ・山椒大夫

樋口一葉 森鷗外 小泉八雲

講談社

913、

樋口一葉 森 鷗外 小泉八雲

少年少女日本文学館 1

たけくらべ・山椒大夫

講談社 1986

286p 23cm

内容：たけくらべ 山椒大夫 高瀬舟 最後の一句 羽鳥千尋
耳なし芳一のはなし むじな 雪おんな

ひぐちいちよう もりおうがい こいずみやくも

少年少女日本文学館

第一巻

たけくらべ・山椒大夫

定価 一四四〇円
(本体 一三九八円)

一九八六年十二月 十四日 第一刷発行
一九九〇年 三月 十二日 第八刷発行

著者……………樋口一葉 森 鷗外 小泉八雲

訳者……………円地文子 平井呈一

発行者……………野間佐和子

発行所……………株式会社 講談社

東京都文京区音羽二一二二二二一

郵便番号 一一二

電話 東京(〇三)九四五一一一(大代表)

印刷所……………株式会社廣済堂

製本所……………黒柳製本株式会社

©富家素子 平井美代 一九八六年

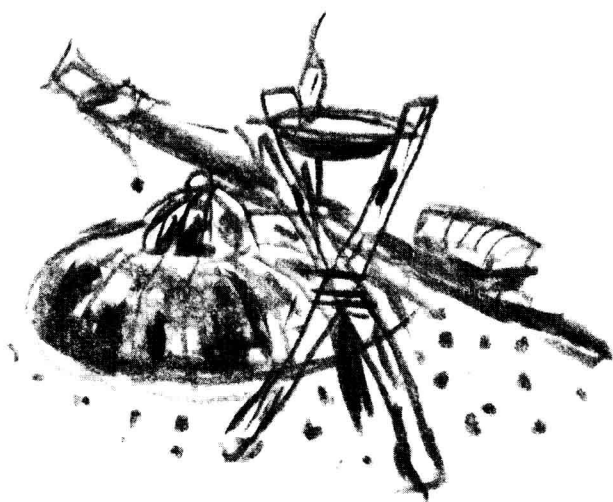
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部あてにお送りください。送料小社負担にておとりかえます。なお、この本についてのお問い合わせは、児童図書第一出版部あてにお願いいたします。

Printed in Japan

ISBN4-06-188251-1

(児一)

も
く
じ



樋口一葉（田地文子訳）

たけくらべ……………9

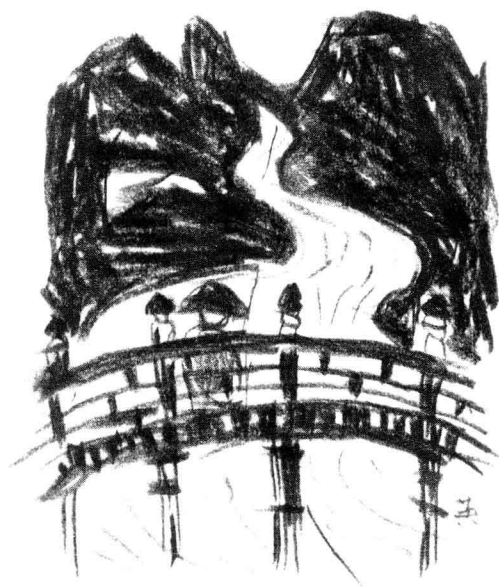
森鷗外

山椒大夫……………95

高瀬舟……………147

最後の一句……………169

羽鳥千尋……………192



小泉八雲（平井呈一訳）

耳なし芳一のはなし……………225

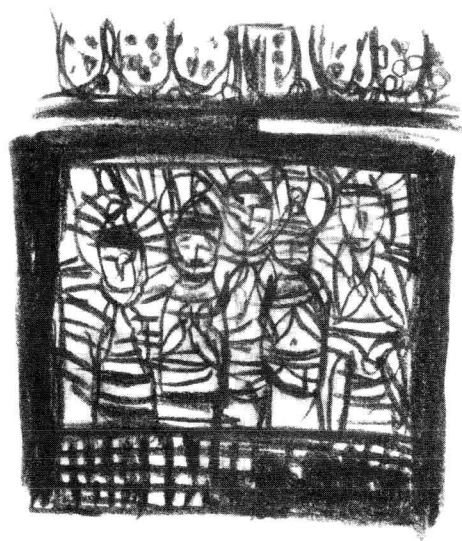
むじな……………249

雪おんな……………254

● 解 説……………266
前田 愛

● 随 筆……………274
杉本苑子

● 略年譜……………280



◆この本の本文表記について

- 現代かなづかい、現代送りがなを使用した。
- 極端な宛て字と思われるもの、また代名詞・副詞・接続詞などのうち原文を損なうおそれが少ないと思われるものをかなにあらためた。
- 本文は総ルビとし、むずかしい語句や事項には、小さな字で注を加えた。注と本文ルビが重なる場合は左側にルビをそえた。
- さらに説明を必要とする語句や事項には、*をつけ、イラストやくわしい注をつけ加えた。

たけくらべ・
山椒大夫



樋^ひ

口^{ぐち}
一^{いち}
葉^{よう}

円^{えん}
地^ち
文^{ぶん}
子^こ
訳^{やく}

たけくらべ



たけくらべ

一

表おし通とりをまわまわって行いけば、大お門もの見み返かえり柳やなぎはかかなりな道みちになるけれども、おお齒はぐろ溝どぶに吉きち原げんの
大だい店てんの灯ひが映うつつて三さん階かいの騒さわぎ、歌うたは手てに取とるようように聞きこえるし、夜よる昼ひるなしの人力くわ車るまの往ゆ来ききに、は
かりしれないほどの繁はん盛じようが窺うかがえて、

「大だい音おん寺じ前まえといいええば、名なこそほとけ仏ぶつ教けつ開かい縁えんのよよううたたかこれはまた
「大音寺前といえ、名こそ仏くさいが、さりとよきは陽やう気きな町まち」と住すみつひとびといている人ひと々びとは言いつてい
た。

三さん島しま神しん社しゃの角かくを曲まがまつてから、これぞと目め立だつほどの家や並なみもなく、軒のき端ばの傾やねいた貧のほしはしげな十
軒けん長なが屋や二十軒長屋、それもこの辺へんは商しょう売ばいはいだめっさい駄だ目めなところなので、昼ひる間まから半はん分ぶんは閉とざし

大門の見返り柳（九ページ）

吉原遊廊（金で男に身をまかせた女郎たちのいたところ）の正門のそばにあった柳。遊廊帰りの客がなごりをおしんでふり返るためについた名。（三ページの地図参照）

お齒ぐる溝（九ページ）

遊廊の周囲にめぐらされていた堀。外と遊廊を区別し、遊女の逃亡を防ぐためのもの。

吉原（九ページ）

新吉原のこと。吉原は江戸の遊廓で日本橋にあったが火事で全焼し、現在の台東区浅草北部に移った。北廓ともよばれる。（二ページの地図参照）

大音寺前（九ページ）

台東区竜泉の俗称。

た雨戸の外に何やら得体の知れぬ形に紙を切つて胡粉を塗りたくつたところは彩色のある田楽そのままで、裏にはった串の様子も奇妙

である。それも一軒や二軒ではなく、朝日に干して夕方にはしまう仕事（いそが）の忙しさ、一家中（いっかじゅう）がこれにかかり切つてゐるのを、何かと問（と）へば、

「知らないのか、十一月の酉の市に、大鳥神社で福（ふく）を取りこもうと欲（よく）の深い人（ひと）たちが買（か）い漁（あさ）り、肩（かた）にかついで帰（かえ）る……これこそ熊手（くまで）の下（した）ごしらえだよ」

と答（こた）える。

正月（しょうがつ）の門松（かどまつ）を取り捨（す）てるころからかかつて、一年中（いちねんじゅう）通（とお）しにやつてゐるのは真（ま）ものの商売（しょうばい）人（ひと）、片手間（かたてま）仕事（しごと）にしても夏（なつ）からかかつて、手足（てあし）は泥（どろ）絵（え）の具（ぐ）に汚（く）し、春着（はるぎ）の仕度（しど）にと骨（ほね）を折（お）るのもこの日（ひ）の儲（もう）けを当（あ）てこんでのことである。

「なむ大鳥（おおとり）大明神（だいめいじん）、買（か）う人（ひと）にさえ、大（おお）きな福（ふく）をお与（あた）へになる程（ほど）なの

三島神社（九ページ）

台東区下谷にある神社。土地の人は親しみをこめてさま付けでよぶ。

十軒長屋（九ページ）

壁で区切られて隣り合わせに細長く家が連なつたのを長屋とい、その家の数で、十軒長屋、二十軒長屋などよんだ。

田楽

とうふに竹串をさして焼き、味噌をつけて食べる料理。



に、製造もとのわれわれには、万倍もの御利益を」と皆、言いあつてゐるけれども、さりとて、これは思ひのほからしくて、この辺に大金持ちの出たという噂も聞かないようである。

住む人の多くは遊廓内で働いてゐる者たちで、夫は格の低い女郎

屋の何という身分なのか、下足札を揃えて土間の敷石に打ちあて、

がらんがらんの音も忙しそうである。夕暮れから羽織をひっかけて

外へ出ると、うしろから切り火を打ってやる女房の顔も、ひよつと

すればこれが見納めかも知れぬ。女狂いの果ての十人斬りの側杖、

無理心中のし損ねと、恨みはかかる危ない身の上、すわといえど命

がけの勤めに、遊びにでも行くような身なりの様子も面白い。

娘は大籠の下新造とやら、廓で七軒の引き手茶屋の女中とやら、

屋号を入れた提燈を下げて、ちよこちよこ走りの修業、卒業したら

いったい何になるのか、ともかく花魁になつて、檜舞台に立つとこ

ろを見たいとかれこれ噂するのも笑止なことである。垢ぬけのした

酉の市(二〇ページ)

十一月の酉の日に各地の大鳥神社で行われる祭り。縁起物の熊手などを売り賑わう。酉の日は、十一支を順に年月日にあてたときに酉にあたる日。

大鳥神社(二〇ページ)

台東区竜泉寺町にある神社。通称お酉様。

熊手(二一ページ)

竹を扇形に組んだものに、おかめ、宝船、小判などの飾り物をつけて商売繁昌を祈る縁起物。



切り火(二一ページ)

出かけるときに、安全を祈って火打石で火花をおこすこと。

十人斬りの側枝(二一ページ)

江戸時代の吉原遊廓で、佐野次郎左衛門が遊女など多数を斬り殺す事件があり歌舞伎にもなった。側枝はまきぎえをくうこと。

大籠(二一ページ)

位のいちばん高い遊女屋。

七軒の引き手茶屋(二一ページ)

客を遊廓に案内する店で、吉原の中でもとくにりっぱな七軒。

唐棧ぞろい

紬地に細いたて縞の柄のおそろいの木綿の着物。

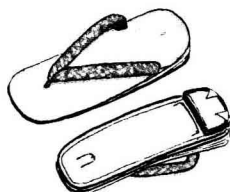
花魁(二一ページ)

遊廓でもっとも位の高い遊女。



雪駄

竹皮の草履の裏に牛皮をはり、金を打つたはきもの。



三十あまりの年増としまが、小ざっぱりした唐棧とうせんぞろいに紺足袋こんたびをはいて、雪駄せつたの音もちやらちやら忙いそが

しそうに横抱よこだきしている小包こづつみは問わなくてもわかつてゐる。茶屋ちややの棧橋さんばしをとんとん音を立てて、

「回り遠まわいわね、ここからあげます」と声をかけるのはあつらえものの仕立屋したてやさん、とこのあたり

では言いっている。一帯いつたいの風俗ふうぞくが他の土地ほかとは変かわつていて、女おんなでうしろに帯おびをきちんと締しめてい

る人は少ひとなく、柄がらを好このんで幅広はばひろの巻まき帯おび……年増としまはまだよろしい、十五、六の小生意気こなまいきなのが、

ほおずきを鳴ならしながら、この身みなりとはと目をふさぐ人もあるであろう。

所ところから、ぜひもないこととて、つい先頃さきごろまでは河岸店かしみせでなに紫むらさきという源氏名（源女などの呼ぶ名）が耳に残のこつてい

るのに、今は地回りじまわの吉と手慣てなれぬやきとりの夜店よみせを出だして、身代しんだいは鳥（財産）のたたき骨（げんじ）のようになつ

てしまえば、ふたたび古巢ふるすの廓くわくへの女房むかし姿はたらいてゐた遊郭がどこやら素人しろうとよりは気がきいてみえ、この風俗ふうぞくを真ま

似ねしない子供こどももいなかった。

秋あきも九月がつ、吉原俄よしわらにわかの頃（四べし）の通みりを見てごらんさい。さりとはいくも勉強べんきやうした露八ろはちの物真似ものまね、栄えい

喜きの語（四べし）り口くち、孟子みづしの母ははが見みたらばどんなにか驚おどろくであらう上達じやうたつの早はやさ、うまいとほめられて今夜こんや

も一回ひとまわりと生意気なまいきは七つ八つからだんだんつゝ、やがては肩かたに置き手拭てぬぐい、鼻唄はなうたのそそり節ふし、

十五の少年しょうねんのませ方が恐おそろしいほどである。学校がっこうの唱歌しょうかにも、ぎっちよんぎっちよんと拍子ひょうしをとつ

吉原俄（二三ページ）

吉原で行われた即興劇。芸者の踊りや、たいこもち（遊客の座をとりもち、芸などをみせる男）の芸に人気があつた。

霧八・栄喜（二三ページ）

二人とも当時実在した有名な幫間（たいこもち）。

孟子の母が……（二三ページ）

教育熱心な孟子（中国の哲学者）の母が見たらば、の意。子どもによい教育環境のために、孟子の母が三度も引越したといういわれによる（孟子二遷）。

て、運動会に木やり音頭もしかねない有り様である。そうでなくて

も教育がむずかしいのに、教師の苦心はさこそと思われる。入谷近

く（育英舎という名で、私立ではあるけれども生徒の数は千人近く、

せまい校舎に目白押しにならぶほど窮屈であつても、教師の人望は

いよいよ現れて、ただ学校と言えば一口でこの辺りでのみこみがつ

くほどのがある。通う子供の数々にあるいは火消し薦人夫、「お父

つあんははね橋の番屋にいるよ」と、習わないでも知っているその

道のかしこさ、梯子乗りの真似をして、「あれ、忍びがえしを折

りました」と訴えのつべこべ、三百代言といわれる弁護人の子もあ

るのであろう。

「お前のお父つあんは馬だねえ」と言われて、子供心にもそうだと

は言うのがつらいらしく、顔を赤らめるのもしおらしい。出入りの

女郎屋の秘蔵息子が寮住居に華族さまを気取って、房つきの帽子、

顔つきもゆったりと洋服をかるがると着て花々しいのを、「坊っちゃ